

メノンの最初の問い

松井 貴英

序

プラトンの対話篇において、その最初の発言や言葉は、その対話篇における主題や方向性を表していると解されうる¹。それは、『メノン』においてもいえる。しかし、冒頭の発言や言葉が対話篇における主題をどの程度まで表しているか、また、読み手に何が求められるかについては、解釈が分かれるように思われる。

本論文では、『メノン』における冒頭のメノンの発言を通して『メノン』の全体像を概観しながら、上記の問題について考察していく。具体的には、メノンの冒頭の発言での「*eipein* (言う、述べる²)」が何をどこまで意味しうるかを探る。それを踏まえつつ、この対話篇の主題やプラトンによる執筆の意図を『メノン』の冒頭箇所に見出しようと解した場合、「*eipein*」のみに注目するのみで十分であるかどうかの検討も行う。もし「*eipein*」のみに注目することが

1 Burnyeat, *First Words*, p. 4

2 プラトンが、哲学探求の文脈において、この *eipein* という語にどのような意味を持たせたと解しうるか？という問題が、本論文で扱う問題のひとつとしてあるので、単に「言う」「述べる」という訳語を充てることには問題があるだろう。しかし、ここでは、日本語における発話を表す動詞の中で最も広範な意味で用いられる「言う、述べる」を、訳語として便宜的にあてることとする。ただし、「言う、述べる」という語が「*eipein*」の最適な訳語であるというわけではないことは、共通了解としておきたい。また、単に *eipein* に対して適切な訳語を充てることが本論文の目的ではないことも、共通了解としておきたい。

『メノン』冒頭箇所についての考察において十分でないとすれば、どの語に注目すべきであるかという提案をすることにもなるだろうし、その語に注目すべき理由を示す必要も生じてくるであろう。

1. プラトン対話篇における冒頭の言葉に関する解釈

Burnyeat は、プラトンの対話篇の冒頭部分における最初の言葉に関して、それを単なる文学的装飾であるとはみなさない。しかし、だからといって、哲学書における冒頭の箇所は、その後続く、読者が知る必要がある哲学的議論についての全てを読者に対して明示しているという立場には与しない³。そして、Burnyeat は「最初に対話篇の冒頭を聴いて、あなたは、知っているいくつかのテーマが意味のあるものとなっていくのを聞くだろう、しかし、それらの重要性が、まさに何であるかを発見するためには、対話篇における対話が展開していくのを待たなければならない。また、あなたが対話篇を知る (you know the opera) 時のみ、冒頭箇所を『読み (read)』そして知る (savour) ことができる。しかし、プラトンの対話篇の哲学的内容は、そのようなプロローグとは異なり、あなたが一目見てその全貌を理解できるようなものではないし、1～2回の熟読によってさえも理解できるようなものではない。プラトンの対話篇を理解するためには、長い年月にわたる哲学的な訓練・経験・学習を要するものなのである (プロクロスはこの点に関して非常に強く同意している)'⁴という理由で、プロクロスの解釈——「対話篇の冒頭は、著作の本質的な哲学的内容に対する関係や関連の中にもたらされる。哲学的内容が適切に理解される時、哲学的内容は、冒頭の場面のディテールの中で想像されたり、ふり返られたりするだろう」⁵——に与しつつ、解釈を展開させる⁶。

3 Burnyeat, pp. 3 - 4

4 Burnyeat, p. 4

5 Burnyeat, p. 3

『メノン』冒頭でのメノンの発言での *eipein* (言う) という言葉は、何かを示唆していると解されうるだろうか。たとえば、「(説得的に) 説明する」ということのみであろうか。あるいは、もっと踏み込んで、「(探求のために建設的かつ説得的な対話を行う過程の中で、探求の対象に関して何らかの言明を行うという意味での) 言う」という意味を、プラトンが込めていると解す可能性を考慮すべきであろうか。あるいは、説得的に説明したり、探求を行ったりすること以外のこと(すなわち論駁的な対話)が *eipein* の中には含まれないことが意図されていると解することは可能だろうか。もしくは、これら全ての可能性を全て含めることを意図して、プラトンは「*eipein*」という語を用いていると解することは可能だろうか。さらに踏み込んで、*eipein* の中に論駁的な対話(の側面)が含まれていると解することは可能だろうか。もし、このように解釈する余地があるとすれば、『メノン』において、ソクラテス的な論駁的な対話(エレンコス)も対話篇のテーマの中に含まれることになるかと解することが可能になるのだろうか。もし、プラトンが『メノン』においてソクラテスにエレンコスを実演させていると解するならば、「哲学的な探求の方法を示す」という『メノン』におけるプラトンの目論見を適切に解釈することに失敗することになってしまうかもしれないけれども、それでもなお、そのようなことがいえるのだろうか。⁷

対話篇の冒頭に『メノン』における読者が知る必要がある哲学的議論の全てが示されているとする立場に与するとしたら、対話篇の読者は、ここで想定したようなことを対話篇の冒頭を読んだ時点で全て知ることになるのだろうか。反対に、この立場に与しないとすれば、*eipein* という語が含意しているものは

6 Burnyeat, pp. 3-4

7 『メノン』は「徳について」という副題がつけられているが、徳は対話のための題材であり、この対話篇においてプラトンが意図していたのは「哲学探求の勧め」であると解するならば、プラトンは『メノン』において、ソクラテスにエレンコスを行わせる事はないかもしれないとする解釈の可能性も否定できないだろう。ただし、本論文においては、この問題を中心的に扱うことはしない。

何であるといえるのだろうか。

このような問題を踏まえつつ、プラトン対話篇冒頭箇所をどのように解すべきかという問題に取り組むためにも、『メノン』冒頭の発言を見ていくことにしよう。

2. 『メノン』冒頭の発言

「徳とはどのようなものか（教えられうるかいなか、あるいはいかなる方法で獲得することが可能か）」をソクラテスに尋ねることを目論むメノンは、対話篇の冒頭で「私に言うことができますか (echeis moi eipein)、ソクラテス、徳は教えられうるものでしょうか？あるいは、教えられうるものでなく、訓練により身につくものなののでしょうか？あるいは、訓練によっても身につくものでもなく、学ばれうるものでもなく、そうではなくて人間にとって元々具わっている本性的なものであるのでしょうか、あるいはそれ以外の何かであるのでしょうか？」(70a1-4) と述べる。この、メノンによる唐突ともいえる問いかけにより、ソクラテスとメノンの対話が始まる。このメノンの発言に対して、ソクラテスは、「徳とは何かを知らないのに、徳とはどのようなものかを知ることはできない」旨の発言(71b1-8)をして、メノンを「徳とは何か」の探求へと誘う。

『メノン』のこの冒頭の対話から、『メノン』は「徳」(特に「徳は教えられうるか」)についての探求がなされる対話篇であるように、一見すると、思えてしまう。しかし、プラトンが『メノン』において意図していたものは、単に「徳(は教えられうるか)」に関する探求ではないと解することもできよう。メノンの冒頭の発言は、たしかに、徳とはどのようなものであるかについての問いであるが、それは、単に徳とはどのようなものかを問うているものではなく、どのようにすれば具わるのかを問うている。この「どのようにすれば具わるのか」という問いが、『メノン』において、非常に重要な論点のひとつであ

るように思われる。さらに、冒頭で「言うことができますか」とメノンが問うている箇所を鑑みるに、説明の可能性についての問いも、重要な論点のひとつであると解することも可能であるように思われる。

3. 含意されている可能性のあるもの

対話篇冒頭のメノンの問いと、それに対するソクラテスの返答には、多くのことが含意されているように思われる。Burnyeat が重視する、メノンの述べる「eipein」が重要な意味を持っているとすれば、eipein の対象も重要になってくると考えてもよいであろう。

対話篇冒頭でメノンがソクラテスに対して要求しているのも、「徳は教えられうるか否か? もし教えられえないものであるなら、いかにして具わるものなのか?」という、徳についてのある性質に関する、何らかの意味や内容を持つことがらを「言う」ことであるのは明らかなことであろう。

この発言に関して、Bluck は、プラトンは想起という答えを『メノン』執筆時に持っていたと解する⁸。もし、この解釈が妥当であるといえるならば、プラトンは、自身の著作において初めて言及する想起説について、読者は冒頭のメノンの発言を読んだ時点ではもちろん想起説については何も知らないのであるから、この対話篇において探求の可能性が問題となることを、探求の可能性を認める根拠となる想起説を思い描きつつ、暗に示そうとしていたと解することも可能かもしれない。

また、冒頭のメノンの発言では、徳を具える方策の候補が（プラトンが想定するものであるか否かに拘らず）幾つか挙げられているが、この中のどれが適切な答えであるかについて、読者が思いを巡らせることを、プラトンは意図しているかもしれない。この点に関して、メノンが冒頭の発言で言及した中のひ

8 Bluck, p.199 とはいえ、Bluck は、このことを想定してはいるものの、解釈の根拠を述べてはいない。

とつである訓練による徳の習得は、『メノン』の中に出てこないことを、Bluckは指摘している⁹。推測の域を脱しないが、このBluckの指摘は、これらの徳を身につける方法の候補について、プラトンが、執筆開始時点では、冒頭の発言で示したものの全てを、対話篇の中で扱うことをどこまで具体的に見越していたかどうかはわからないことを、言いかえれば、プラトンが、冒頭執筆時点で、対話篇の議論の展開の構想を一字一句同じとまではいかないにしても、どこまで具体的かつ綿密に想定していたかを確信をもって明言することは極めて困難であることを示唆しているようにも思われる。

もし、冒頭箇所における哲学的議論の全てが示されているとする先述の解釈に従い、冒頭のメノンの発言全体がそれに該当するといえるとするなら、冒頭のメノンの発言において示されることの全てが対話篇において議論されていないことを、どのように解釈することになるのだろうか。メノンの冒頭の問いにおいて言及されながらも、その後の対話篇の展開の中で話題に上らなかったものは、プラトンにとっては、取るに足りないものであり、議論する値打ちもないがゆえに、無視されたと解することになるのだろうか。もしそのように解するとすれば、的外れなものを冒頭の問いの中に紛れ込ませるメノンは、ソクラテスとの対話によって哲学的探求を行う資質を持ち合わせていないということになるのだろうか¹⁰。しかし、メノンには、ソクラテスとの対話が困難に陥った状況をパラドクスの形で述べるだけの知的能力が具わっていると解することも可能であり¹¹、その解釈に与するとすれば、冒頭のメノンの発言についての的外れとしてにべもなく片付けてしまうことを無条件で受け容れることはできないようにも

9 Bluck, p. 202

10 メノンに、ソクラテスとの哲学的問答を行う資質がないとする解釈を、多くの学者が採っている (Taylor, 1926, pp. 135-136, Bluck, 1961, p. 125, Klein, 1965, p. 92, Weiss, 2001, p. 21など)。

11 松井 (「メノンは賢いか否か」 pp. 12-13)、Scott (*Plato's Meno*, pp. 60-65) がこの立場である。

12 Burnyeat, pp. 12-13

思われる。

Burnyeat¹²は、冒頭のメノンの発言に関して、次のように解する。このメノンの発言の *eipein* により示される「徳は教えられうるか……」は、「ソクラテスが『メノン』における主要な哲学的問いに答えなければならない」という要求に等しいと解する。また、ここでのメノンの問いは、『メノン』がプラトンの想起説をもたらしている対話篇であることを考慮すれば、誰も答えを教えてもらえたり述べてもらえたりされえない問題であるとする。そして、解決困難な対話法的問いの刺激を受け、自分自身で探求の道を進んでいかなければならないとする。これらの点を踏まえて、Burnyeat は、たとえメノンの問いに対する答えをソクラテスが知っているとしても、それをメノンに述べることは有益ではないとする。そして、我々読者は哲学的探求の本質に基づく問答の中心部における長い議論を自分自身で行うまでは、このことを十分に認識することはないだろう。それゆえ、『メノン』冒頭の問いの意味は、対話篇を読み進めていかなければ明らかにはならないだろう、とする。

たしかに Burnyeat の述べるとおりに、『メノン』冒頭でのメノンによる唐突な質問における *eipein* が、『メノン』における中心的テーマのひとつであるといえる「哲学的探求」を示していることは確かであろう。だが、Burnyeat は、「あなたは解決困難な対話法的 (dialectical) 問いの刺激を受け、自分自身で探求の道を進んでいかなければならない」「たとえメノンの問いに対する答えをソクラテスが知っているとしても、それをメノンに述べる (tell) ことは有益ではない」と述べたり想起説や仮設法に言及したりしているものの、*eipein* がどのような「tell」であるかを明確に述べてはいない¹³。

Burnyeat の述べるとおりに *eipein* によって『メノン』という対話篇の全体像が（それがたとえ暗示的であったり示唆的であったりするとしても）示されているのであるとすれば、「*eipein* をどのような “tell” であると解すべきか」

13 Burnyeat, p. 13

という問題が起こってくるようにも思われる。それは、単に *eipein* の語の意味を特定する必要があるといった程度の問題ではなく、プラトンが様々な対話篇において描いている哲学的探求についての方法や対象とはどのようなものであるかという問題であるともいえよう。

メノンの述べる「言う」(*eipein*) の対象は「徳は教えられうるか……」という徳の性質のひとつであるのに対し、ソクラテスは、メノンの問いに素直に答えることはせず、徳の性質ではなく定義を知ることの優先性を述べる。この構造が、対話相手(メノン)による(徳の)性質に関する問いに対して、ソクラテスによる(徳の)定義の探求の優先性に関する発言という、プラトンの初期対話篇における常套的な展開であることから、「メノン」前半における、探求のパラドクスが示されその返答として想起説が示されるまでの、ソクラテスとメノンによる徳の定義の探求に関する対話を、論駁的(*elenctic*)対話¹⁴であるとする解釈も多い。

ソクラテスの論駁的な対話の方法が「メノン」前半部(70a-80a)において用いられているかどうか、もし用いられているとすれば、それはどのように用いられていると解することができるだろうか。

Vlastos による、プラトンの初期対話篇におけるソクラテスの論駁的対話に関する代表的な解釈では、プラトンの中期対話篇においては頻繁に言及される探求の方法(*methodos*)に関して、初期対話篇におけるソクラテスは、決して「方法」という語を用いないし、ソクラテス自身が用いる探求の方法が議論されることもなく、対話篇中のソクラテスは、自分の行っている方法を「*elegchos*」「*elegchein*」と呼んではいるが、その方法に対して、「論駁法(エレンコス)」

14 プラトンの初期対話篇での、ソクラテスによる対話における論駁的方法に関して論じたものとしては、Vlastos, *The Socratic Elenchus* がまず挙げられよう。ところで、「メノン」における前半部分が論駁的対話であるか問答対話であるかに関する考察や、ソクラテスの論駁法自体に関する考察は、非常に重要な問題ではあるが、本論文の主題を超えた大きな問題であるがゆえ、本論文では扱わず、諸解釈の概略や解釈者の紹介にとどめておく。

を固有名として扱い、自身の方法にその名をつけたわけではないと解する¹⁵。そして、実際にエレンコスにおいてソクラテスが行っているのは、言明 p が偽であることへの批判ではなく、言明 p が両立できない前提群の中のひとつであることへの批判であると解する¹⁶。

ソクラテスが、『メノン』前半部分において、このような方法でメノンに対して対話を行っているとは解することが妥当かどうかに関する詳細な検討はここでは行わないが、ソクラテスが論駁的な方法で対話を行っているとする解釈者には、Fine¹⁷などがいる。それに対して、ソクラテスはメノンに対して知識の検討ではなく、メノンの提出した通俗的な意味での徳の思いなしの検討を行っているがゆえ、この箇所におけるソクラテスとメノンによる徳に関する対話は、高度なレベルのものではないが、ソクラテスとメノンの対話は問答法的(dialectic)であるとする解釈者には Franklin¹⁸がいる。

先述のように、もしソクラテスがメノンに対して、ある程度の論駁的な問答をしているとすれば、冒頭の *eipein* に、この対話篇におけるソクラテスの論駁的対話が、ある程度含意されていると解しうることになるのだろうか。あるいは、論駁的な対話の方法は用いられておらず、ソクラテスとメノンによる論駁的ではない対話が、*eipein* に含意されているといえるのだろうか。

4. 『メノン』について知るとは

ここまでの議論を踏まえつつ、『メノン』について知るとはどのようなこと

15 Vlastos, p.28. この論文において Vlastos は、特に『ゴルギアス』におけるソクラテスの論駁的な対話の方法に関して議論を展開していて、『メノン』前半部におけるソクラテスとメノンによる徳の定義に関する対話を直接扱っているわけではないけれども。

16 Vlastos, p.29

17 Fine, *Inquiry in the Meno*, pp. 200-226

18 Franklin, 'The Structure of Dialectic in the Meno', p.419

かという観点から、『メノン』冒頭の発言をどのように解すべきか考えていこう。

先述の、冒頭の場面は読者が知る必要があるその後続く哲学的場面の全てを明示しているとする解釈に従いつつ、この冒頭箇所を解するとすれば、読者に明示されるのは、『メノン』における議論の全てであることになる。また、Burnyeat の解釈に従えば、それらは後からふり返られることになる。では、明示されている、あるいはふり返られるものとはどのようなものであろうか。単に、「徳は教えられうるか」について、ソクラテスとメノンが対話しているという事実のみだろうか。あるいは、それ以上のこと——徳の性質を知るためには徳の定義を知らなければならないという定義の優先性や、学ぶとか探求するというのは想起に他ならないという学習としての想起についての命題や、幾何学の探求のように仮設の前提から出発した探求の方法といったもの——だろうか。あるいは、それよりも深い理解として、『メノン』冒頭からの「徳とは何か」を探求するソクラテスとメノンの対話は論駁の対話である（とする解釈がある）とか、あるいは論駁的な対話ではなく哲学的な問答である（とする解釈がある）とか¹⁹、定義の優先性に基づく探求から困難に陥ったメノンは、自身とソクラテスによる対話の現状を、「知らないものを探求することはできない」という逆説として素直に吐露した²⁰（とする解釈がある）とか、想起は誰もが行いうる容易な概念形成である²¹（とする解釈がある）とか、想起はそのような概念形成ではなくアイデアの存在を信じている哲学者のみが行うことができる高度な学習である²²（とする解釈がある）とか、ラリサへの道における議

19 この文脈では、極端な考え方をすれば、対話篇の冒頭を読む際に、これまで提出されたあらゆる解釈をも知っていなければならないということになるというナンセンスな結論に行きついてしまいかねないという議論をおこなっているのが、以降で示される解釈については簡単な紹介にとどめ、ひとつひとつ検討はしない。

20 たとえば、松井「探求のパラドクスと想起」pp. 35「メノンは賢いか否か」pp. 12-13

21 たとえば Moravcsik, pp. 112-128 など。

22 たとえば、Scott, *Recollection and Experience*, pp. 5-6

論でプラトンは、知識を持っている状態とは地図を見るように俯瞰的に見通すことが可能である状態であることを述べようとしている²³（とする解釈がある）とか、そのようなレベルのことだろうか。あるいは、このレベルではまだ足りなくて、『メノン』はプラトンの哲学において、初期と中期の橋渡しとなる対話篇であり、プラトンがシケリアで触れたピュタゴラス派やオルベウス教の影響が各所に見られると解されうる対話篇であり、プラトンの哲学に発展性を見て取る際には、その意味で過渡期あるいは分岐点となる対話篇であり、『ゴルギアス』と同時期に執筆されたが、どちらが先に執筆されたかは解釈が別れていること等についてだろうか²⁴。

5. 『メノン』冒頭箇所再考

先述のように、プラトンは、『メノン』の執筆を開始する際に、この対話篇において何を議論するかを、一字一句というわけではないが、ある程度の想定をしていたと解するならば、その想定が、冒頭箇所において、ほのめかしのようなものとして現れると解することは自然なことであろう。その意味で、先に言及した、冒頭箇所において想起という答えを持っていたとする Bluck の解釈や、*eipein* にそれを見出そうとする Burnyeat の解釈は、妥当なものであるといえよう。

しかし、プラトンの『メノン』執筆開始時点での想定は、単に、後に対話の主題となる想起説についてのほのめかしといったようなものだけではないようにも思われる。この冒頭箇所でもメノンがソクラテスに対して求めている返答は、「徳は教えられうるか」という問いに対してプラトンが最終的な答えとして想

23 この解釈を採用しているのは Kanayama, *Plato as a Wayfinder*, pp. 73-86

24 たとえば Scott (*Plato's Meno*, pp. 194-208) は、『メノン』の方が『ゴルギアス』より先に著されたと解する。

25 『メノン』冒頭におけるメノンが哲学探求を求めているかどうか、また、哲学探求を行うに足る能力を具えているかどうか、という問題にも関わってくるであろう。

定しているようなレベルのものではないかもしれない²⁵。しかし、もしプラトンが『メノン』執筆開始時点で想起説を想定していたとするなら、冒頭箇所におけるメノンの知的探求のレベルではなく、哲学的探求のレベルとはどのようなものであるかについての何らかの示唆を、プラトンは冒頭の問いに与えていたと考えることは無理筋なことではないだろう。もし、このように考えることが妥当であるとすれば、プラトンが『メノン』冒頭におけるメノンの発言に込められた意図は何であるといえるだろうか。そして、その意図を、プラトンは何らかの形で表現しているといえるだろうか。

6. 説明の可能性と探求の可能性

対話篇の冒頭でメノンは、ソクラテスに対して「echeis moi eipein」(わたしに対して言うことができるかどうか)と問うている。この発言は、徳は教えられうるかどうかについて、単に「eipein」(言うこと)を求めているのではなく、「言うことが『できる』(echeis)かどうか」という可能性を問うている質問である。プラトンがメノンに対話篇冒頭で可能性を問う質問を述べさせたのは、『メノン』執筆を開始する際に、説明の可能性に関する問題意識を持っていたからであると想定することも、可能かもしれない。もしこの想定が妥当なものであるとすれば、探求の対象を説明することができるかどうかということが、哲学的探求の方法において、重要な役割を果たしていることを、『メノン』執筆開始時点でプラトンが想定していたと解することも可能かもしれない。もちろん、対話篇執筆開始時点の段階で、プラトンがどこまで具体的に探求の可能性の議論を想定していたかは想像の範囲を超えることはない(たとえば、探求の可能性や発見の可能性を述べるためには、探求のパラドクスを解決しなければならないと考えていたかもしれないし、あるいは、Bluckの解釈のように執筆開始時点で既に想起説を思い描いていて、想起説の導入のために探求のパラドクスを用いようと想定していたかもしれないし、あるいは仮設の前提に基づ

く探求の方法に関しても、探求の可能性や説明可能性の議論のために、執筆を想定していたかもしれないし、知識獲得に際しての説明の必要性に関して、原因の思考に言及する必要があると想定していたかもしれない——といった想像である)。

『メノン』執筆開始時点で、プラトンがここまで具体的に議論の展開の筋道やあらすじを想定していたかどうかはわからない。しかし、プラトンが自身の哲学の立場として、探求の可能性を肯定的に捉えていたことは、『メノン』を読み進めていけば容易に理解できることであるように思われる。そして、その立場を執筆開始時点で既に保持していたとすることは、妥当な推論であるように思われる。もし、この推論が妥当であるとすれば、プラトンは、探求の可能性を肯定的に捉えつつ、メノンに説明の可能性を問う質問を述べさせたと解することも可能になるだろう²⁶。

プラトンの対話篇において、哲学探求は、ソクラテスと対話の相手による問答によって展開される。たとえば、想起の実演の後で展開される仮設の前提に基づく探求においても、説明の可能性が重視されていると考えられる。ここでは、最初に、「徳が、魂に関わるもののうちでどのようなものであれば、教えられうるか、あるいは教えられえないか」(87b5-7)という問題が設定される。この問題の解決のために、仮設に基づく探求の方法が重層的に用いられる。

26 このことから、もしプラトンが探求の可能性と説明の可能性には親近な関係があると考えていたと推測することが可能であれば、探求のパラドクスへの反論として探求の可能性を示すために対話篇中に提示される想起説は、説明の可能性についての答えにもなりうる可能性があるだろう。もしそのように考えることが無理筋ではないとすれば、想起するとは適切な仕方ですく説明することと親近な関係があるといえることになるだろう。そして、もしそう考えることが妥当であるとすれば、プラトンが『メノン』執筆開始時点において、既に、想起によって知識を獲得することとは、Bluck (p. 12) の述べるような「直知 (seeing)」するようなことではなく、適切な説明ができるようになることに近いものであるということ想定していたと解しうることになるだろう。そしてそれは *aitias logismos* をどのように解釈するかという問題にも繋がっていくことになるだろう。

そして、「徳が知識であるとするれば、徳は教えられうるといえる」(98c3-4) という帰結に到達する。このように仮設の前提に基づく探求は、細かな推論の連鎖により進められていくのである。そして、このような推論には、言葉による説明が不可欠であり、探求を進めていくためには、説明の可能性が不可欠の要因となると解すこともできるように思われる。

このように解することが妥当であるなら、プラトンは、冒頭のメノンの発言に、説明の可能性をも念頭に置いていたと解することができるようにも思われる。

7. まとめ

以上の考察を踏まえて、プラトンの対話篇における最初の言葉を読むとはどのようなことかをまとめてみよう。対話篇の冒頭に読者が知る必要がある哲学的議論が示され意図され暗示されているとしても、冒頭の本語を読んだ時に即座に対話篇の議論の全体を知ることができるわけではない。我々が対話篇を読み始めた時点では、最初の言葉は対話篇において議論されるテーマや内容を暗示してはいるけれども、それらの全てが明示されているわけではないとすれば、対話篇における哲学的対話の流れを読み進めていき、テーマや内容を理解した後、冒頭の発言をふり返る時、我々は、プラトンによるその対話篇執筆の意図を、冒頭の発言によって、その対話篇における哲学探求の主題や道筋が示唆されていたことに気づくと共に、より深く考えるきっかけを与えられるといえるだろう。

『メノン』においては、この対話篇を読み進めていくにしたがって、読者は、「徳とは何か」についての対話、探求のパラドクス、想起の実演、仮設の前提に基づく探求、ラリサへの道、原因の思考といった議論に触れる。それらに触れた後に冒頭の発言をふり返る時、我々は、プラトンが探求の重要性を述べていること、そして、探求は対話を通して行われること、対話によって哲学探求

を行う際には、質問に対して適切に答えを言うことができること（説明の可能性）が求められることに気づき、そのことについてより深く考えるきっかけを与えられるといえるだろう。

参考文献

- R.S. Bluck, *Plato's Meno*, Cambridge, 1961
- M.F. Burnyeat, First Words, *Proceedings of the Cambridge Philosophical Society*, 43, 1997, PP.1-20
- G. Fine, Inquiry in the *Meno*, Kraut (ed.), *The Cambridge Companion to Plato*, Cambridge, 1992, pp.200-226
- Lee Franklin, The Structure of Dialectic in the *Meno*, *Phronesis XLV* 1/4, 2001, pp.413-439
- Yahei Kanayama, Plato as a Wayfinder: To Know *Meno*, the Robbery Case and the Road to Larissa, *Japan Studies in Classical Antiquity*, vol.1, 2011, pp.63-88
- Jacob Klein, *A Commentary on Plato's Meno*, the University of Chicago Press, 1965
- Julius Moravcsik, 'Learning as Recollection', Jane M. Day (ed.), *Plato's Meno in Focus*, Routledge, 1994, pp.112-128
- Dominic Scott, *Recollection and Experience-Plato's theory of learning and its successors*, Cambridge University Press, 1995
- *Plato's Meno*, Cambridge, 2006
- A. E. Taylor, *Plato: The Man and his Work*, Methuen Co. Ltd, 1960 (7th edition. First published 1926)
- G. Vlastos, The Socratic Elenchus, *Socrates Critical Assessment*, Rautredge, 1991, pp.28-59
- Roslyn Weiss, *Virtue in the Cave: moral inquiry in Plato's Meno*, Oxford University Press, 2001
- 松井貴英「探求のパラドクスと想起」【名古屋大学哲学論集】第7号、2005年、33-50頁
- 松井貴英「メノンは賢いか否か」*Nagoya Journal of Philosophy*, No. 4, 2005, pp. 1-16